

「時を超えて響く」 日本のピアノ修理店を訪ねて

Boaz Kirschenbaum 著

日本が、非常に古いものと非常に新しいものの交差点であるということは、最も評価されているところです。しかし、日本文化と日本のピアノについての、あなたの先入観を取り去って下さい。私が日本人の姿勢（そして、特に日本のピアノ）について知っていた事柄の多くは、人通りの少ない路傍の小さなアトリエでの、他に類のない経験によって変わりました。

古城楽器（ピアノ修理工場）は、日本の地方部に建っており、本当に仕事熱心である父と息子によって営まれています。『パリ左岸のピアノ工房』が極東にあるのをイメージしてください。（訳注：『パリ左岸のピアノ工房』T・E・カーハート著／村松潔訳、新潮クレスト・ブックスより出版。セーヌ左岸に住む「パリのアメリカ人」である「わたし」が、ピアノをもう一度弾いてみたいと思い、近所のピアノ工房に相談するところからはじまる長編エッセイ。そこはピアノの部品や修理工具を扱うほか、中古のピアノに関してあらゆることをする一風変わった店で、頑固な職人と調律師が登場します。）

古城楽器の人々は、「ピアニスト」です。彼らは、ピアノの買取り、販売、復元から移動と調律まで、彼らはそのすべてを、自分たちで行います。彼らは、それらの難しい仕事を、完了する方法を知っているのです。

マモルさん（年上の古城さん）は、長年にわたり調律とピアノの販売業を続けています。彼は、現在は半ば引退しています。そして、家業を彼の息子であるヤスヒロさん（ヤマハの工場で訓練を受けた調律師）に引き継ぎました。ヤスヒロは、今は20年以上の調律師としてのキャリアを持ち、そのうえハンブルグ・スタインウェイコンサートアカデミー（訳注：スタインウェイによるコンサートチューナー認定を受けるためのアカデミー）に参加しました。

マモルは、自分には、将来の世代のためにピアノを保存する義務があると言います。私がそれを弾いてみてからは、彼と彼の息子さんが、戦前の欧米のピアノの音を聞く耳を持っているということが分かりました。私は、彼らが戦前のピアノの「音のモデル」が、戦前のベヒシュタインである、と語っているのを、訪問の後、彼らのウェブサイトで見ました。それは、私が彼らのサロンで聞いた音色の印象と、完全に一致しました。彼らはまた「時を超えて響くピアノ」と銘打ったコンサートも最近開催したと話し、折よくその記事もすぐに見つけることができました。

私の妻のサキコの家族（両親、姉妹そして兄弟）は、日本の小さな都市、九州の南側にあり、城下町の一つでもある、熊本県に住んでいます。九州は、本州（東京や浜松があり、日本の人口の大部分が住む中央島）と、全く異なります。九州には、くつろいだ、のんびりした感じがあり、山々にある温泉が有名です。

サキコは、2004年に渡米する前に、ピアノを作り直している楽器店について聞いたのを思い出しました。

私は、考えました。「作り直している？日本人は古いものは拒んだり、使用済みのピアノは片付けたりするのでは？」答えは、そのどちらでもあります。多くのことと同じように、時々、西洋人であるわたしたちには、日本人について非常に全般的な見方をしていることに気づきます。そう、中には、最新の技術が大好きな日本人もいます。しかし、多くの日本人は、過去やそれにまつわるものに畏敬の念を持っているのです。あなたが聞いたことがあるかもしれないそれとは対照的で、日本の消費者は、実際には中古車や中古ピアノを買っているのです。

古城楽器は、スタインウェイ&サンズを扱っています。彼らは、シュタイングレーバー&ゼーネも扱っていましたが、それらは最近輸入が困難になってきたとのこと。これは、本当に私の興味を刺激しました！—私は、日本人のピアノ顧客たちは固い音色を好んでいるとずっと思っていました、そのピアノのそれは、私が考えている音色とは、まったく異なっています。私は心の中で思いました、この人たちは、たいしたものだ— 彼らはシュタイングレーバーの音色が好きだと言います。これは、「日本人好みのPiano Tone」に対する私の固定観念の錠を開ける、最初のカギとなりました。

彼らは市街地の現代的なショールームで新しいピアノを売ることに加えて、郊外の修理工場で、古いピアノを修復します。そこにある大部分のピアノは、顧客からのオーダー、またはショールームで販売するために修復されています。しかし、何台かのピアノは、日本のピアノ作りの歴史を保存するために復元されています。古城家家長のマモルさんは、古いピアノのための博物館を作ることを長年夢見ていました。

私は、今から紹介することが、日本は閉鎖的であるかのように見られていることを打開すると信じています。私は、修理工場を訪れるために、事前の予約が必要かもしれないと思っていました。しかし、妻のサキコが修理工場に電話をすると、彼らはごく単純に、いつでもどうぞ、と言うのです。私は、彼女が熊本の出身であるということが大きく影響しているのかと思いました。地元のつながりというのは常に、大きな砕氷船のように効果を発揮するものです。初対面の場では名刺を交換することが伝統的で、私は日本語にした名刺を持っていかなかったことを後悔しました。しかし、結局は、それは重要ではありませんでした—この人たちは、私に対してすっかりリラックスしていました。

修理工場は、とても郊外にあることが分ります。大通り、市街地から離れていて、熊本を囲む阿蘇山と連なる山々の山麓。ありがたいことに、晴れて暖かい、美しい早春の日です。

修理工場は、植木の林、起伏する丘、この季節(2月下旬)には、梅の花に囲まれています。私が最初に気づいたのは、ハイテク・トラック・クレーンを備えています—です。我々が使うものよりも、もっと小さなピアノ・クレーンです。トラックは、改造された新型のフラットベッドのいすゞトラックです。これを見ただけで私は、この人たちはピアノ運送について、軽い気持ちでやっているのではないということを素早く悟りました。

(写真)

古城楽器の運送クレーン車。このトラックは、その見た目よりもっと小さいです。

遅い午後の冬の日差しの中で、すべてはロマンチックで美しく見えます。年長のコジョウ(マモルさん)は、私たちを出迎えるために外へ出てきました。そして、何人かいた作業中の人々は、暗い修理工場から顔を覗かせます。誰かな？というように。私たちは自己紹介をし、お互いの共通事項であるスタインウェイについて話しながら、中に入りました。誰もが上機嫌で、良いムードでした。—今日は土曜日で、お天気も良いし、もうすぐ切り上げて、家に帰って、夕食にBASASHIを食べたり、少しSHOCHUを呑んだりするのもかもしれない…

修理工場の最初のスペースでは、彼らは、旧式の万力の上に持ち上げられた、古いカワイKG-2の弦と外装をクリーニングしています。二重通気口とタービンを備えた塗装専用ブースを見せてもらい、そして、ほとんどのピアノ修理工場に見られるような、作業台のあるエリアに進みます。そのとき私は、古くて巨大な、低音弦巻線機があることに気づきました。私は、それを今までにほんの数台しか見たことがなく、そしてこれは、その中でも最も大きいものです。それは、ヤマハの工場で作られていたものです。その当時は自動化されていましたが、手動使用するように後から改造しました。技術者の1人が、低音弦を巻きます。至る所にアクション(訳注:ピアノの内部機構)や、小さなヤマハ製のオルガン(戦前のもののよ

うです)まであります。そして彼らは、私にニューヨークスタインウェイについて尋ねます。

彼らが、すでに修復を終えたニューヨークスタインウェイのコンソール型ピアノ、1970年代のModels F 40"を、手直していることがわかります。日本で、ニューヨークスタインウェイには特別な地位があることは明らかであり、そして、これも例外ではありません。彼らはこれが最後に売るピアノになるというので、わたしはあつけにとられてしまいました。私たちは、古いピアノを探し出すことについて話し始めました。そして、もしかしたら、私たちは一緒にビジネスをするようになるかもしれません。もうひとつ奇妙なことに、というも私は今までにそう聞いてきたからなのですが、日本人の実業家とこのようなレベルの話し合いを持つためには、互いに意見を交わし合い、信頼関係を築く必要があります。それには、数日、数週間、あるいは数か月かかるかもしれません。しかし、ここにいる彼らはとても気楽にっていて、ダイレクトです。私たちはまだ、彼らにとって知らない人と通訳であるのに、旧知の信頼する同僚に話しているような感じなのです。私はのちに、彼らのスタイルは、日本では珍しいことを知りました。

(写真)

ヤマハ工場の低音弦巻線機。

(写真)

スタインウェイModel Fは、響板と鉄骨の再塗装が終わっている。

我々は、少し散漫としてしまいます。この小さなお店にたくさんのピアノがあり、そして私たちには、お互いに尋ねたいことがあったのです。私は、長居しすぎて飽きられないように、早く切り上げようと一生懸命努力しました。これはセミナーではなく、私は本来、彼らの秘密やトリックを学ぶためにここにいるのではないからです。私は彼らの仕事について話を聞いたり、古いピアノを何台か見ただけだったのです。私たちは、作業場からたくさんの古いアップライトピアノやベンチを保管しているところを過ぎ、階段の上にある博物館へと進みます。

新しめのヤマハ・グランドピアノで満たされた、かなりの広さの保管場所の次に、一対の小さなガラスのドアのある、隔たれたサロンが見えます。その扉の向こうに、赤いじゅうたんと低い天井、柔らかかにですが直接あたるようにされた照明の中に、複数の黒いピアノが見えます。それはまるで、ひょっとして1950年代のピアノ保管庫へタイムワープしたように見えます。それぞれのピアノの横に、プラカードが飾ってあります。日本の習慣として靴を脱ぎ、私たちは博物館の中に入りました。

部屋は、およそ30フィートの正方形です。一辺のついたて様の壁に、ピアノ・ポスターと古いピアノ・カタログが掛けられています。このついたての後ろには、隣接した植木林に面している二、三の大きい窓と、小さな通路があります。ここにある古いカタログは、素晴らしいです —商品は全てイラストで表示されていて、価格さえ表記してあります— 1933年のカタログで、ヤマハグランドピアノ平臺3号は、2,250円していました (これは、当時で250ドルぐらいかもしれません)。私はこのカタログは、実はデジタルスキャンされたものですね、と話しました。しかし、マモルさんはすぐに、彼のアーカイブから本物の、20世紀初頭の、ヤマハピアノ・カタログを取ってくるのです。そして、歴史の一部が、新品のそれのように私の手に押し込まれます。私は、それが日本に2冊しか残っていないうちの1冊だと聞かされます。私はナーバスになりました —私は、それを汚したりしたくなかったのです。私は、1、2ページを見たあと、すぐにそれを返しました。彼は非常に穏やかにそのカタログを扱い、めったにそれを出さないと私に話します。なぜ、私の訪問は、特別な対応を受けているのか?と、不思議に思います。

部屋の中央は、広く空いています。コンサートのために、簡単に椅子を用意することができます。部屋の側面には、いくつ

かの非常に古いアップライトピアノがあります。一つはベルリンのスタインバーグで、隅にはまだ未修理のグロトリアン＝シュタインヴェグの1925年製160cmのグランドピアノがあります。ここの目玉は、グロトリアンの後ろにある、壁の半分を満たす、完全修復した1933年製の7本足のピアノです。ヤマハグランドピアノ平臺3号は、それぞれ2本ずつの脚がついています(I、Eといった品番より前のC7。ヤマハは、製品の機種を示すために数字を使っている)。

平臺3号の隣に、これまた完全修復した1939年製の中型グランドピアノNo.20があります。これらの2つのピアノは、商品と同じコンディションにあります。私は考え始めます。ヤマハは彼らに、この信じられないほどハイエンドな仕事に金銭援助、あるいは後援者を支援したりしたのだろうか？ しかしそのすべてが、篤志事業であることがわかりました。ヤマハはこの博物館の使命をサポートし、若干の技術的な問題(我々はその1分でそれを解決できる)を援助しました。しかし、彼らは新しいピアノを売ることに従事し、博物館を管理することはしませんでした。私は手擦りの艶出し塗装仕上げを見ることができました。鉄骨は、金粉を美しく再塗装されていました。これらのピアノは、ピンブロックと響板はオリジナルのまま、弦は張り直されています。アクションは、新しいハンマー(ヤマハまたはアベル)をつけ、そして、いくつかの新しい部品は、伝統的なリバランスを実現しています。これは、復元です。一維持再設計でも、再製造でもなく。

[日本の歴史についてメモ…それは通常「時代」と記述されます： 明治1868-1912年、大正1912-1926年、昭和1926-1989年。古城楽器は、彼らが明治時代や昭和のピアノを修復すると謳っています。彼らはオーバーホール(全修理)も手掛けています。しかし、彼らはピン板と響板については、よほどの場合でない限りそのまま使用します。日本は、これらの2つの構成要素を状態良く保存できる、かなり湿った気候です。]

隣接した壁に、完璧に修復されたヤマハアップライトピアノ(おそらく日本で最も古く、そして完全修復を施された数少ないヤマハアップライトピアノでしょう)が4台あります。まず一台は、1920年代、昭和時代のヤマハアップライトピアノです。黒い無地の外装だが、腕木や妻土台は美しい曲線を描いています。私はいくつかのメロディを弾いてみました。そして、ごく軽い指使いで、大きすぎず、かといってデリケート過ぎない音色を響かせ、私を、心地よく驚かせてくれました。それは、まるで古いベヒシュタインのように聞こえます。私はすぐに、このピアノの音色が気に入りました。

壁の中央には、大正時代のアップライトピアノが2台あり、私たちは、後期ビクトリア時代へ誘われます。これらのピアノには金の細線細工が施され、一台は真鍮の枝つき燭台を備えています。そして両方とも、一枚からできた、完璧な象牙の鍵盤が使用されています。それぞれのピアノは、完全に異なる感触と音色を持っています。一方は軽く、一方は重めのアクション—しかし、それぞれに、個性的で美しい音色、まるでベルのような音をしています。それに、このピアノたちもまた、古いドイツのピアノのような音色をしています。

部屋の一角には、他のピアノたちに対抗するように、明治時代のアップライトピアノがあります。このピアノは、ヤマハが組み立てた最初のピアノのうちの一機です。このピアノには製造番号も機種名もないので、1903年ごろ造られているという事実などから、彼らはそれを明治時代のプロトタイプ(試作品)であると考えています。

そのピアノも、金銀の細線細工、枝付き燭台と美しい黒い塗装が施されています。ですが、このピアノの前に座ると、何か他のものを得たような感覚が…、まるで過去の日本へのチケットを与えられたように、私は感じます。

それは、他のものより小型(ほとんどキャバレー・ピアノのような)で、73鍵あります(訳注:現代のピアノは88鍵)。折り畳みの譜面台(逆様にして中に収納できるタイプ)もついています。鍵盤蓋には、古いヤマハのロゴが入っています。

アップライトピアノ。

明治時代のピアノは、ヤマハが直接携わったプロジェクトの1つです。特別のポスターを作り、コンサートなど催されました。工場も、このピアノのために、カスタムメイドのハンマー1セット作りました。(訳注:このエピソードについては、昭和天皇即位記念モデルの内容です。昭和天皇即位記念モデルは、ヤマハの本社工場で修復されたものです。明治時代の試作ピアノを含む、熊本ピアノ歴史館のピアノは全て、古城楽器が完全修復しています。)

私は座って、少し弾いてみます。その音色は、非常に繊細で、良く響きます。それは全く素敵で、ドビュッシーまたはショパンにうってつけです。私は、すこしジャズも弾いてみました。このピアノでなら、あなたも簡単に、ビル・エヴァンスの音を奏でることができるでしょう。その音は、音階も、鐘のような音も、常温圧縮ハンマーのように発音します。多分、私はもう少しこの音色を聞く必要があるでしょう。

我々は座って、もう少し話し合いました(工場の従業員が、濃いコーヒーを持ってきてくれます)。

私はもう一度、大きい7フィートのグランドピアノ平臺3号のもとへ移動しました。そして、今度は演奏しようとピアノの前に腰掛けました。私は、しばらくの間、即興のジャズや、半音階のスケールを弾いたりしました。私は、顔がほころぶのを抑えることができません—まるで、古いスタインウェイの(つまり現代の、大手ヤマハのようでない)音色なのです!調律は、低音域は少しだけ低く、高音域は高すぎず、ほぼ完璧な音階です。このピアノは最近調律されたばかりではないとのことでしたが、まだその音程は素晴らしく、おそらくこの部屋の空調管理が非常に安定していることによるものでしょう。アクションのバランスも良い感じです—しっかりとしていて、安易すぎない、現代のヤマハとは違っています。このサイズのピアノで、私たち皆が求めている全ては…まさにそれなのです。

私は、家庭向けの大ききのグランドピアノNo.20も弾いていみます。ベルのような高音、良い感じの中低音、低音は若干バランスが崩れていましたが、ちょうどまさにスタインウェイグランドピアノM型の音色にそっくりです。このもう一つのピアノの美しい修復からも、古城さんの良い仕事ぶりが理解できます。それは、彼らが、サイズやスタイルに合わせた音色を作り出す方法を知っている、ということを示しています。

私は、ここにあるピアノ全てについて、音を「作る」ために必要な要素は一つだけではなく、古くても状態が良く、木材が安定していて、正しい整音がなされており、原型の設計が保たれているという条件全てが相まって、構成されているという結論に至りました。彼らは彼らの流儀ですべて行っているのです、これらのピアノをヤマハピアノであるとするのは不自然なことです。

私は後からヤスヒロに、どこのハンマーを使っているのか尋ね、私たちは、ハンマーの種類や、アベル製のものについて、アメリカの調律師たちはどんなハンマーを使っているのか、などなど、興味深い議論を交わしました。彼はハンマーについて鋭い視点を持ち、常温圧縮されたハンマー(彼はまだそれを試したことがなかったので)を試してみたい、と言いましたので、私はサンプルを送ってあげると約束しました。私には、常温圧縮されたフェルトのハンマーが、一日中ハンマーに整音針を打ち込むという重労働をしなくても彼が求める音色をもたらし、彼を非常に助けてくれるであろうことが分っています。私も、ヤマハの新しいコンサートグランドピアノCFXでは常温圧縮のハンマーが使われていることを、ヤスヒロから教わりました。これは、要確認の、非常に興味深いニュースです。

明治時代プロトタイプ。

私はPTGへのコネクションについて話し、このことを記事にしても良いか尋ねました。2人の古城さんは私の依頼に対して驚いたように見え、そして「ありがとうございます。」と言いながらお辞儀をしました。私たちは集まって写真を撮り、会合の最後に、工具について少しか話しました。ヤスヒロさんは、古いヘールのチューニングハンマーを探すのを手伝ってほしいと言いました。彼はアメリカの工具が好きで、私に整音工具をいくつか見せてくれました。手にすると重たく感じ(彼は3つの重量の異なった整音道具を持っていて、針が1本の仕様のもの以外はすべて重たかった)、整音の名人が、大変な敬意を持って私に接していることを光栄に思いました。彼は、私がどんな道具を使うのか知りたかったので、話してあげると彼は理解してうなずきます。私たちは、翻訳者さえいてくれれば簡単に心通わせることができるのです。

私たちは深くお辞儀をします — 私は何百回もお辞儀をくりかえし、この3か月後に理解するのですが、日本ではそれが尊敬の証であり、私も今となっては、お辞儀について以前よりも共感しています。ヤスヒロさんは、今日は私からたくさんのことを学んだ、と言います。しかし、私は考えます。今日一番学んだ人物—日本のピアノ文化、二人のピアニスト、お互いの言語を知らずとも、私たちは古いピアノの音色を見出すことができるということを学んだ人物について。

古城さん一家のおもてなしと、私たちの滞在の間を辛抱してくれた妻の家族に、特別な感謝を送ります。